吹田市民の戦争史 ④

戦争は普通の市民を殺すものなのです。

家は一面の焼け野原。「これは遺骨ではないか」というものを拾い上げて、「祖母」と「叔母さん」ということにしました。

萩原　昭夫さん（佐竹台在住）

萩原さんら、吹田の戦争体験者が寄稿した「永久の平和を願って」

Q 萩原さんは中学生のときに空襲に遭い九死に一生を得られたんですね。

萩原　私は昭和8年に姫路で生まれましたから、12歳で終戦を迎えます。昭和20年4月に旧制の鷺城（さぎしろ）中学校に入学するんです。姫路城の中に学校があって、姫路城は別名「白鷺城」と呼ばれていましたから、鷺城中学校という名前だったんですね。体育で「今日は天守閣まで登って降りて来い」といった一風変わった授業を受けていました。授業といっても毎日軍事教練ですね。敵に勝つために柔道や剣道を退役軍人が指導するのですが、常に「コラーッ！」と怒鳴りつけるので怖かったですね。その頃から姫路にもB29が編隊を組んで飛来してきました。いよいよ本土決戦だな、と感じていましたね。

Q 3回も空襲の被害に遭われるんですね

萩原　一回目は昭和20年6月22日です。家の近所に「川西航空機製作所」があって、そこが狙われました。その日は晴れていて、上空からパラパラとゴマをふりかけるように爆弾が落ちてきました。爆弾は見る見る大きくなり、ザーという轟音になって3～4キロ先に落ちていきました。目と耳をふさがないと、爆風で鼓膜が破れるほどでした。工場付近は全滅。家の裏にお寺があって、そこに真っ黒焦げの死体、頭のない死体が担架で運び込まれてきました。焼かれて熱かったんでしょう、川に飛び込んで浮いている死体もありました。

Q 2回目の空襲ではご家族も犠牲になられたんですね。

萩原　あれは7月3日の夜でした。空襲警報が鳴って、いつものように家族3人で防空壕に入っていきました。叔父は2階の物干しから外を見ていて「姫路駅がやられているぞ」「危ない！」と叫び、別の壕に入りました。その時、ドーン、ドドーン！と地響きが轟いて13発もの爆弾が落ちてきたのです。12歳の私は身軽だったので、何事かと、壕を飛び出して外へ出ました。あたりは火の海。壕の中から祖母が、「昭夫！危ないから壕に帰ってきなさい！」と悲痛な声で呼んでいました。これが私の耳にした祖母の最後の声です。当時軍は、「壕に入れば安全」と根拠のない指導をしていましたから、祖母はその指導に従ったのです。ものすごい暑さの中、火の海を潜り抜けて田んぼに出ました。夜空に多数の焼夷弾が空中で炸裂し、子爆弾が花火のように飛び散っていく様を、「きれいだな」と眺めていました。夜が明けて、家に帰ると一面の焼け野原。このあたりに家があったであろうという場所で、祖母を探しました。後で「これは遺骨ではないか」というものを拾い上げて、この骨は祖母で、これは手伝いの叔母さんだろう、ということにしました。

Q 3度目の空襲はどこで？

萩原　母親の実家に帰り、友達と田んぼで遊んでいたら南の空からカラスの大群のようなグラマンの編隊がやって来たのです。その内の一機が黒鉛を上げて急降下してくる。私たちは日本軍の対空砲火がグラマンに命中したと勘違いして、「ウワーッ！」と喜んで落ちてくるグラマンに近づいていったのです。その時バリバリバリッ！と銃声がして、そのグラマンが私と友人たちを撃ってきたのです。私はとっさに用水路に身を投げて助かりましたが、友人2名が殺されました。今から思えばあのグラマンは遊び半分で子どもを狙ったのでしょう。

Q 合計3回の空襲に遭い、辛うじて生き残れたことに運命のようなものを感じますか？

萩原　2回目の空襲で、私は外へ逃げて助かりました。今でも、なぜあの時防空壕へ戻って祖母を助け出してあげられなかったかと、後悔しています。と同時に、あの時助けに行ったら、私も焼き殺されていたかもしれない、とも考えるんです。祖母は「私だけでも助かって！」と願っていたのでしょう。私はそう思うことにしています。そうしないと、心が平静を保てないからです。姫路空襲の死者は514人、罹災者は55402人で、これは当時の市人口の51%です。戦争は普通の市民を殺すものなのです。

沖縄 取材ノート

松井 宏員（新聞記者）

「十九の春」の物語（上）

本竹祐助が歌って1972年に初めてレコード化された「十九の春」

「主さん主さんと呼んだとて主さんにゃ立派な方がある　いくら主さんと呼んだとて一生忘れぬ片思い」

私の耳元で歌うのは、バタヤンこと田端義夫。一昨年9月、リサイタルを前に取材した時のことだ。「十九の春」の話を振ったところ、この一節を口ずさんで「いい詞じゃないですか。直接、感情を表してる文句だから。一番最初に歌ったときは、泣けてしょうがなかった」と語った。

バタヤンが歌って大ヒットしたのは、沖縄が本土復帰した3年後の1975年。当時、担当したレコード会社の元プロデューサーは「田端さんが、自分で沖縄や奄美、徳之島などの歌を集めていた。その中に『十九の春』があり、こんな曲があるんだけど、ぜひ歌いたいと言うので、沖縄の音楽プロデューサーに相談した」と述懐する。

沖縄の恋歌として親しまれている「十九の春」。この歌には深く、長い物語があった。

◇

バタヤンの「十九の春」には、作詞・作曲者の名前が記されていない。代わりに「沖縄俗謡、本竹祐助補作詞」とある。本竹祐助は現在59歳の民謡歌手。昨年3月、那覇の国際通りで営む民謡酒場で会ったのだが、最初、本竹は「十九の春」について話すことを渋った。この手の取材が本土から結構来るが、自分の言うことを取り上げてくれない、というのがその理由のようだった。

「十九の春」を世に送り出した備瀬

実は、本竹は「十九の春」が72年、沖縄で最初にレコード化された時の歌い手なのだ。「普久原恒勇さんが『田端義夫が歌わせてくれ、と言ってる』と。その前に、別の歌い手に歌わせていたんで、まずいんじゃないかと言ったが、どうしてもというんで歌わせた」。普久原恒勇とは、前述したレコード会社の元プロデューサーが相談した人物で、沖縄市で「マルフクレコード」というレコード店を経営し、沖縄民謡をプロデュースする沖縄音楽界の大立者だ。

レコード化に当たって、重要な役割を果たした人物がもう一人いる。沖縄市で「キャンバスレコード」を営む備瀬善勝（63）だ。「5、6歳の時、本部（沖縄本島北部）に疎開していて、酔っぱらった兵隊が『一銭五厘のはがきさえ』と歌っていた。近所に本竹が住んでいて、私が歌ったら『その歌知ってる』と言う。いい歌詞だったので、普久原さんに『録音しよう』と言ったら、『そんなの売れるか』と言われた」

マルフクレコードで録音した。備瀬は「スタジオはトタン屋根で、雨降りでは録音できなかった」と笑う。「『同じ琉球に』を『同じコザ市に』と本竹が変えたから、補作詞を本竹にした。タイトルは、本竹も知らず、じゃあ十九の春にしとこうやと」

ところが本竹は、古里の与那国島で「十九の春」のタイトルで歌われていたと言い、両者の話は食い違う。「当時、1番と6番しかわからなかった。恒勇さんが『祐助、あとの歌詞、作ってみ』と言うんで、自分の失恋の思い出を歌詞にした」

元歌が何なのかが「十九の春」の謎なのだが、備瀬はこの点でも、本竹とはまったく違う見方をしている。（敬称略、つづく）